熊谷スマートシティシンポジウム

【日時】令和５年（２０２３年）７月４日（火）13:30～16:00

【場所】さいしんホール

【次第】○開会

○来賓紹介

○市長挨拶

○スマートシティ宣言

○クマぶらのリニューアルお披露目及び地域通貨（地域電子マネー、コミュニティポイント）の名称・ロゴ発表

○写真撮影

○基調講演「デジタルによる持続性のある地域づくり
～市民参加とデータ活用によるまちづくり～」

国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室
坂口正樹　専門調査官

○令和５年度熊谷スマートシティ事業概要説明

①クマぶら・データ活用まちづくり

②地域通貨（地域電子マネー、コミュニティポイント）

③コミュニティバスのスマホ回数券

④気象シミュレーション・暑さ対策スマートパッケージ・スマートエコタウン

⑤人流データ活用まちづくり

質疑応答

○パネルディスカッション

「やさしい未来をつくるデータ活用まちづくり」

パネリスト

国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室	坂口正樹	専門調査官
立正大学データサイエンス学部	白木洋平	教　授
千葉大学大学院工学研究院	鈴木弘樹	准教授
コーディネーター	大島英司	副市長

○今後のスマートシティの取組

○閉会

○　開会

司会　皆様、本日は、熊谷スマートシティシンポジウムにお越しくださりありがとうございます。私、本日の司会を務めます、市長公室政策調査課長の長島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、講演等の間は、携帯電話の電源をお切りいただくか、マナーモードにしていただきますよう御協力をお願いいたします。

それでは、開会のことばを長谷川副市長から申し上げます。

長谷川副市長　こんにちは、副市長の長谷川でございます。

この度は、熊谷市主催の「熊谷スマートシティシンポジウム」に御臨席頂きまして大変ありがとうございます。

このシンポジウムは、「やさしい未来発見都市　熊谷」の将来像のもと、スマートシティの実現に向けて取り組んでいくという、本市の決意と方向性を、市内外へ広くお示しし、市民の皆様、本市のことを応援してくださる皆様とともに歩んでいくため、開催させていただきました。

本日のシンポジウムの様子は、録画、編集を行いまして、後日ウェブ上で放映も予定しておりますが、御来場いただきました皆様には、デジタルの重要性やデータ活用の可能性について共有いただき、熊谷市の未来を肌で感じていただく機会となれば幸いです。

それでは、ただいまより、「熊谷スマートシティシンポジウム」を開会いたします。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

○　来賓紹介

司会　次に、御来賓の皆様を御紹介申し上げます。恐れ入りますが、御紹介の際、御起立いただきますよう、お願いいたします。

熊谷市議会議長 須永宣延様。

スマートシティ推進協議会副会長で熊谷商工会議所会頭の大久保和政様です。本日は、代理として、熊谷商工会議所副会頭の栗原良太様にお越しいただいております。

本日基調講演をいただきます、国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室専門調査官坂口正樹様。坂口様には、パネルディスカッションにも御参加いただきます。

本市のスマートシティ推進に当たり、専門的な見地から御助言をいただくチーフアーキテクトの立正大学データサイエンス学部教授、白木洋平様。白木様にもパネルディスカッションに御参加いただきます。

スマートシティ推進協議会副会長及び本市アーキテクトのプライムライフテクノロジーズ株式会社執行役員、藤井顕司様。

本市アーキテクトの千葉大学大学院工学研究院准教授、鈴木弘樹様。鈴木様にもパネルディスカッションに御参加いただきます。

本市アーキテクトのトムソン・ロイター株式会社ストラテジック・アライアンス・マネージャー、江頭靖二様。

同じく、合同会社ツクル代表、三宅創太様。

同じく、株式会社構造計画研究所社会デザイン・マーケティング部シニアコンサルタント、北上靖大様。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

司会　続きまして、本日のシンポジウムへ祝電を頂戴しておりますので、お名前を御紹介いたします。

農林水産副大臣、野中厚様。

衆議院議員、森田俊和様。

誠にありがとうございました。

○　市長挨拶

司会　ここで、小林熊谷市長から皆様に御挨拶を申し上げます。

小林市長　改めまして、皆さんこんにちは。熊谷市長の小林哲也でございます。

本日は、熊谷スマートシティシンポジウムを開催しましたところ、皆様方には大変御多用のところ、このようにたくさんの皆様方に御出席いただきましたことを心より御礼申し上げます。

また、日頃から、本市スマートシティの推進に対しまして、御理解と御協力をいただいておりますことに、改めて御礼を申し上げます。

さて、デジタル技術や官民の様々なデータを活用して、地域の抱える諸問題を解決し、持続可能な都市を目指す「スマートシティ」のまちづくりが始まっており、全国で工夫を凝らしたモデル事業が展開されています。

本市でも、令和２年度から「熊谷スマートシティ推進協議会」を設置し、モビリティや、まちなかへの誘導に関する人々の行動変容等について検討や実証実験を重ねてまいりました。

さらに、今年度は、第２次熊谷市総合振興計画の後期基本計画のリーディングプロジェクトに位置付けた、「ＤＸ（デジタル・トランスフォーメーション）による市民生活の利便性向上と新たな経済活動の創出」の実現に向けて、実装機能の拡大を計画的に進めてい

く段階に入ったことから、デジタル技術を活用し、誰もが自律的に、幸せを追い求めることのできる『やさしい未来発見都市』を本市の将来像とすることを宣言し、具体的な取組をお知らせする場として、本シンポジウムを開催させていただきました。

本日のプログラムですが、国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室専門調査官坂口正樹様から「デジタルによる持続性のある地域づくり～市民参加とデータ活用によるまちづくり～」と題しまして、スマートシティに取り組む意義・必要性などを始めとする、本市の取組にも関わる大変興味深い内容で御講演を頂きます。

また、今年度、本市が取り組むスマートシティ関連事業、５分野の取組について御紹介させていただくとともに、「やさしい未来をつくるデータ活用まちづくり」をテーマに、坂口専門調査官様、立正大学データサイエンス学部教授、白木洋平様、千葉大学大学院工学研究院准教授、鈴木弘樹様のお三方をパネリストにお迎えし、パネルディスカッションを行います。熊谷市の在り方の参考になる、貴重なお話がお聞きできることを楽しみにしております。

本市のスマートシティの取組は、実証の段階から実装の段階へと、大きく飛躍する時を迎えました。繰り返しとなりますが、本日のシンポジウムでは、デジタルと人の力により、市民の皆様、関係皆様の暮らしの充実と利便性の向上を目指す、本市のスマートシティの取組が、新たなステージに入ったことをお示しし、その可能性についてお伝えしたいと思っています。

そして、本日のシンポジウムを通して、産・学・官・民が一体となったスマートシティによるまちづくりの実現に向け、より多くの皆様が理解を深め、積極的な御参画を頂けるよう御期待申し上げ、私からの挨拶といたします。

本日はよろしくお願いいたします。

○　スマートシティ宣言

司会　続きまして、熊谷スマートシティ宣言を行います。

小林市長　熊谷スマートシティ宣言～デジタルと人の力で、社会を前に進めていく～

「やさしい未来　発見都市　熊谷」

私たちが社会生活を営む中で、多くの仕組にデジタル技術が組み込まれる時代になりました。これらは既になくてはならない仕組で、全ての世代が、その恩恵を受けています。

熊谷市は、この変化の激しい時代の中で、地域社会を持続させ発展させるために、市民と共にまちの未来をつくる仕組を考え続けてきました。その一つの手段として進めてきた、デジタル技術やデータを活用した多くの仕組みが、今、本格的に動き出す時を迎えています。

これらの仕組は、私たちの暮らしや人生を豊かにするものでなければなりません。その豊かさをつくるために、熊谷市では皆様ひとりひとりが、“えらべる”“つくりだせる”という環境を整えています。それは熊谷市を、新しい『発見』が生まれ続けるまちに変えたいという願いを込めています。

いつの時代も、豊かなまちをつくるための根幹は、このまちで暮らす人、このまちを愛してくれる人たちの思いです。それらを守りながら、熊谷市に関わる全ての皆様と共に未来をつくるためには、デジタル技術を活用して、“つながる”“わかりあう”という輪を広げていく必要があります。

それを推進する力は、私たち熊谷市がこれまで「スポーツのまち」として培ってきた結束力と情熱であり、デジタル技術の利活用でも、新たな価値を生み出す強さとなることを信じています。

熊谷市が描く未来は、デジタル技術を活用し、誰もが自律的に幸せを追い求めることのできる未来です。熊谷市は、この未来に向けた思いを『やさしい未来発見都市』という言葉に込めました。

私たちだからこそできる取組を、デジタルの分野でも発揮する。

熊谷市は、デジタルと人の力で、社会を前に進めていく「熊谷スマートシティ」の実現に向けて取り組むことを、ここに宣言します。

令和５年７月４日

熊谷市長　小林　哲也

○　クマぶらのリニューアルお披露目及び地域通貨（地域電子マネー、コミュニティポイント）の名称・ロゴ発表

司会　続きまして、熊谷スマートシティの入口となるスマホアプリ「クマぶら」と、市民皆様の暮らしを便利にする地域通貨、地域電子マネーとコミュニティポイントの名称とロゴを発表させていただきます。

最初に、「クマぶら」について、少し説明をさせていただきます。「くまぶら」は、まちの情報発信を行い、皆様の行動変容を促すデジタルツール「まちあるきアプリ」として導入し、令和３年度に実証実験を行い令和４年度から本格稼働しました。

さらに今年度は、地域電子マネーやコミュニティポイントなど、熊谷スマートシティを知るための役割を果たすこととなるため、機能を拡張してまいります。

そこで、これを機にこれまでのスクマムのデザインから、熊谷スマートシティのポータル、入口を意識したデザインに変更を行います。

なお、本市のスマートシティのツールであることが一目でわかり、親しまれ、多くの皆様に御利用いただけるよう、デザインは引き続き「人と人とのつながりを大切にする」、

「肩を組んで前に進む」という本市がラグビーで培った精神を表すキャラクターである「スクとマム」を用いた上で、アイコンやキャッチコピーを変更いたします。

それでは、市長から発表いたします。

小林市長　これが新しいクマぶら、「熊谷知るならクマぶら」です。

司会　次に、これから熊谷市で始める地域電子マネーとコミュニティポイントを発表いたします。

まず、地域電子マネーは、今年の 11 月から「クマぶら」を入口として利用開始を予定しています。利用開始と同時に、25 パーセントのプレミアムを付けた総額 10 億円となる「プレミアム付地域電子マネー」の販売を開始します。

また、来年 3 月には一般販売を開始します。

次に、コミュニティポイントですが、こちらも来年の 3 月から「クマぶら」を入口として利用開始を予定しています。イベント等に参加することでポイントを貯め、貯めたポイントで主催者側が用意したサービスや記念品を受け取ることができるもので、換金性はありません。

それぞれ 5 月に名称を公募し、410 件の応募の中から決定しました。

それでは、市長から発表いたします。

小林市長　地域電子マネーはクマ PAY（クマペイ）、コミュニティポイントは、クマポです。

司会　ありがとうございました。

以上で、地域通貨の名称及びロゴ発表を終了いたします。

○　写真撮影

司会　それでは、ここで、写真撮影を行います。

まず、ステージ上で、来賓の皆様の写真を撮らせていただきますので、来賓の皆様御起立ください。

（写真撮影①［ステージ］）

御協力ありがとうございました。

来賓の皆様、ステージ下のお席へ御移動をお願いいたします。

続きまして、ステージ側から客席側へ向かって写真を撮らせていただきます。

このスマートシティの取組を進めるには、市だけでなく市民の皆さんも含め、産学官民の連携により進めていくこととなります。

本日お招きしました、熊谷スマートシティ推進協議会及び各部会の皆様、産業界の皆様、国・県等関係機関の皆様、学校・大学関係の皆様、スポーツ・教育関係の皆様、市民活動団体の皆様、交通関係の皆様、まちづくり関係の皆様など、熊谷市に関わる全ての皆様の

熱い思いや御協力が欠かせないものです。

そこで、みんなで熊谷スマートシティを進めていく、という熱意を、見える形で記録させていただきたく、御来場の皆様全員での集合写真を撮らせていただきたいと存じます。

恐れ入りますが、最初に、中央通路より前方の方でカメラの死角になる方は職員が誘導しますので、中央通路へ御移動をお願いします。

中央通路より後方の方は、御起立をお願いいたします。

（写真撮影②［客席］）

皆様御協力ありがとうございました。

皆様お席へお戻りください。

○　基調講演　「デジタルによる持続性のある地域づくり ～市民参加とデータ活用によるまちづくり～」

司会　続きまして、基調講演として、国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室専門調査員官坂口正樹様から「デジタルによる持続性のある地域づくり～市民参加とデータ活用によるまちづくり～」をテーマに御講演をいただきます。

坂口様は、官民連携プラットフォームの事務局を担われており、現在、スマートシティ全般を対応していらっしゃいます。

それでは、坂口様、よろしくお願いします。

坂口専門調査官　ただ今御紹介にあずかりました国土交通省都市局都市政策課デジタル情報活用推進室の坂口と申します。本日はよろしくお願いします。非常に長い部署名なのですけれど、実は 7 月に新設されたばかりの室になりまして、国土交通省の都市局の中のまちづくり DX 関連の取りまとめですとかプロジェクトプラトー、それからスマートシティ、そういったものを担当する部署になっております。私はその中で、スマートシティ全般を対応させていただいておるのですけれども、本日はデジタルによる持続性のある地域づくり、市民参加とデータ活用によるまちづくりということで基調講演をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、スマートシティの定義というところから御説明をさせていただきます。こちらがスマートシティのガイドブックというものの中に定義づけられているのですけれども、御紹介させていただきます。スマートシティガイドブックの基本理念、基本原則に基づき新技術や官民各種のデータを活用した市民一人一人に寄り添ったサービスの提供や各種分野におけるマネジメントの高度化等により都市や地域が抱える諸課題の解決を行い、また新たな価値を創出し続ける持続可能な都市や地域というところで定義づけされております。いくつかポイントとなるワードが出ておりますが、新技術ですとか官民各種のデータを活用。それから、市民一人一人に寄り添ったサービス。都市や地域が抱える諸課題

の解決。新たな価値を創出し続ける持続可能な都市や地域というところで要素が詰まったものになっております。

スマートシティに取り組む上での基本コンセプトということで、三つの基本理念、それから五つの基本原則というものが定められております。時間の兼ね合いで全て御紹介することはかなわないのですが、特に重要な三つの基本理念ということで御説明させていただきます。

まず「市民（利用者）中心主義」というところです。こちらに書いてありますように市民の皆様の well-being（ウェルビーイング）の向上というところがスマートシティの最大の狙いとなります。行政や民間事業者などの供給側ではなくて市民中心の目線に立って市民自らが主体に取り組んでいくといったことが重要になってきます。

次に「ビジョン・課題フォーカス」ということです。スマートシティを持続的な取組としていくためには、地域の課題や目指していくビジョンに対応したサービスを提供していくことが必要となります。そのため、新技術ありきではなくて、まちの課題や実現するビジョンがまず先にあって、それを実現していくための手段として新技術が使われるというようなスタンスが重要になってくるということでございます。

最後に「分野間・都市間連携の重視」ということで書いております。こちらは単発のサービス、単発の取組ではなくて、さまざまな分野のデータやサービスを連携させていくことによって、地域の複合的な課題に対応していくといったことになっております。そうした連携をしていくことで全体最適な地域を実現していくといったところで三つ基本理念を掲げております。

スマートシティと言いますと、最先端の技術を入れることが目的になってしまうなど、そういったことがあるのですけども、そうではなく課題やビジョンが先にあるというところで御理解をください。課題といいますと、各地域、都市には都市の、またローカルにはローカルの課題があると思います。なので、技術の内容ではなくて、その地域の課題にマッチしたものであれば、大きくても小さくてもそれがスマートシティであるということが言えると考えております。またこのスマートシティの取組で都市が抱える課題を全て解決できるものではございません。各地域の福祉政策や環境政策、都市政策などさまざまな分野の政策と一体となって初めて目指すべき地域像が実現されるといったところになっておりますので、スマートシティと各種政策を連携させていくというところがポイントになって来るかなと考えております。

次にスマートシティの政府における推進体制ということで説明させていただきます。本日は私の方が国土交通省から説明をさせていただいておりますが、スマートシティの取組は、内閣府を筆頭に国土交通省、総務省、経済産業省、デジタル庁ということで、5府省庁が連携をして推進をしているところでございます。当然行政だけでこのスマートシティを実現できるものではございませんので、スライドの右側でございますが「産官学連携のスマートシティの推進体制」ということで、令和元年に、スマートシティの官民連

携プラットフォームというものを設立いたしました。こちらでは、この右下に記載しておりますようなさまざまな支援しているのですけれども、例えば事業支援ということで、資金面、それからノウハウ面で各府省が一体になって支援していくですとか、分科会活動としては、共通する課題を抱える地域や民間の事業者の方が分科会を開催して課題解決に向かって推進していくとか。あとは、課題を解決したい自治体、ニーズを持つ自治体とそこに提供したい技術、シーズを持つ民間事業者の方をマッチングするような支援もしてございます。さらに普及活動ということで、スマートシティの取組の普及、モデル事業で得られた知見等の横展開ということで実施をしてきてございます。令和元年から徐々に会員やオブザーバーの方が増えてきてございまして直近では約 950 団体が参画いただいているといったところになっております。

こちらは御参考までにですが、令和 5 年度に各府省で実施した支援事業の内容となっております。直近、先週の金曜日に、おそらく各府省から採択結果が開示されておりますので御興味のある方は、どういった地域のどういった取組がスマートシティとして行われているかということで、各府省のホームページを御参考にしていただけたらと思っております。

ここからはデータを活用したまちづくりについて触れさせていただきたいと思います。前提としまして、スマートシティの取組における課題認識ということで御説明させていただきますと、全国におけるスマートシティの取組というのがようやく広がってきたかなというところではありますが、多くが個別の分野、それから個別の地域での実証段階にとどまってしまっているというのが現状なのかなと考えております。このような課題を踏まえて単発の取組ではなくて複数のサービスが連携していくことで市民の皆様により利便性の高いサービスを提供することができるということを示した資料として、「スマートシティサービスの連携ユースケース」という資料を国土交通省の方で作成しております。こちらは今年の 4 月にホームページに掲載しておりますので、今日全てを紹介することはできないのですけれども、御興味のある方は御覧を頂けたらと考えております。本日はその中から、「アプリを用いた「まちなかの情報」の提供による、賑わい創出」というところで御紹介をさせていただきます。

こちらはスマートフォンのアプリを用いたまちなか情報を提供することによるまちの賑わいを創出していくといったところのイメージになります。特徴として上の方に記載しておりますが 3 点ございまして、まちなかに関するアプリの構築や利用によってこれまでできなかったプッシュ型のサービス提供等を実施することでまちの賑わい創出につなげる。そして、利用者情報に応じたパーソナライズされたサービスというのも提供されることで、さらに改善、高度化が期待できるというところと、最後にアプリの構築やサービス提供にあたって 3D 都市モデルを活用した AR・VR・グラフ等の視覚的な表現が可能になるということで書いております。全体の流れとしては、まずアプリ提供者側でアプリを用意するところから始めるのですけれども、まちなかの情報、関連する施設や店舗の

情報をインプットする。それから市民の皆様にアプリの利用開始にあたって利用者情報の登録をしていただく。そうすることで、属性やその人の場所等にあったアプリでの各種サービスの提供が可能になって、デジタル技術を使ったまちなか情報の可視化ということも可能となります。さらにこのサービス提供で終わらず、このアプリを利用された方のデータをより活用することで、さらに高度化されたサービスに役立てていくですとかアプリの利用データの可視化・分析に役立てるといったことが可能となっております。

もう少し具体的な事例ということで御紹介させていただきます。こちらのスライドでは右側にアプリが持っている一般的な機能ですね、プッシュ通知、基本情報の提供、検索、ルート表示、個人の属性情報の取得とか、一般的な機能を並べております。左側にはそれらをかけ合わせることで実現するサービスの例を示しております。例えばアプリの機能の中でプッシュ通知、通知を出す機能と個人属性情報の取得機能それから現在地情報の取得機能を提供することで来街者の方の属性や、嗜好や現在地情報を踏まえたプッシュ型の情報提供が可能となります。これまでは、さまざまな媒体、紙だったりメールだったりファックスだったりいろんな媒体でバラバラと情報発信をしていたのですが、アプリに統合することで、より利便性の高いサービスを実現している事例となっております。

また、左下のところですね、「まちなかの環境案内機能」というところでは、これまでですとその場所に行ってみないと、当日の快適性でしたり、混雑状況というのがわからなかったものを、まちなかの情報をスマートフォンのアプリに反映することで、アプリで確認することを可能としています。先ほど御発表のあった「クマぶら」にも通ずるところかと思いますので、この後詳しくお話をお聞きできればと考えております。さらに一歩進んだ地域というところですとアプリ利用者の方の行動データと、まちなかに設置した AI カメラのデータを掛け合わせることで人流データ等を分析して、さらに分析活用してまちの活性化につなげていくといった地域も出てきております。こちらでお伝えしたかったのはアプリというのは出して終わりというものではなくて、さまざまな情報を組み合わせることでどんどん育っていくといいますか利便性が高くなっていくといったものでございますので、リリースをした後も複数分野の機能、サービスというのを連携させて、より市民の皆様の利便性向上に寄与していただきたいというところでございます。

ここからは、持続性のあるスマートシティサービスを実施するための推進体制ということでお話をさせていただきます。こちらの資料は令和 4 年の 3 月に出したスマートシティモデルプロジェクトからの知見集からの抜粋で、先ほどのユースケースと同じようにホームページに公開しておりますが、各地区ですでに取り組まれているスマートシティから、参考になるような知見、ノウハウを集めて掲載したものになります。こちらも今日は一部、推進体制ということで説明をさせていただくのですけれども興味のある方はホームページを御覧いただけたらと考えております。

まずスマートシティを推進していくための組織内の体制ということで書かせていただきました。二つ書いておりまして、まず一つ目は挑戦する首長のリーダーシップ。それか

ら二つ目はその首長と緊密なコミュニケーションを図れる組織体制ということで記載しております。こちらの組織体制というのは各地区さまざまな特色があると思いますので、一様に何が正解というものはないのですけれども、事例として二つ、大規模なものと小規模なものということで掲載をしております。まず石川県加賀市では、大規模かつ機動的な推進体制、全庁での取組ということで、割と大掛かりな体制を構築して市全体で進めていくというところになります。逆に小規模な事例としては福島県の会津若松市ですけども、2022 年度当初は 5 人で構成されていたというところで、どちらかというと首長の政策方針と、それをスピーディに実施するというところでこのような推進体制を取られたと聞いております。こちらは本当に地区ごとに特色を踏まえての組織編成になろうかと思いますので、どのようにして組織全体に伝播させていくかというところで最適な体制を整備していただけたらと考えております。

次に官民連携ということで書かせていただきました。先ほど政府の推進体制のところでも、行政だけではなかなか進まないという御説明をさせていただきましたが、官民連携の体制を整えるためにということで、多様な関係者が参画できる体制の整備、それからコミュニケーションを促進する場の設置、実証実験をするフィールドの提供ということで書いております。具体例としては大規模なコンソーシアムを組成している例として、香川県の高松市を挙げております。直近ですと、おそらく 150 弱くらい参画しているのではないかなと思いますが、多様な方がこのコンソーシアムに参画していらっしゃるというところです。当然 150 も参画していますと活動や意欲というところで濃淡は出てきてしまうのですけども、大規模な連携する体制を構築することで多くの団体の方との情報共有ですとか、一度にコミュニケーションを図るといったことが可能になっております。また、官民連携のための場、フィールドの提供ということでいいますと福島県会津若松市の AiCT（アイクト）という ICT オフィスがございます。こちらは市の方で整えた ICT オフィスというところに市外からも事業者の方を招いて官民の対話やイノベーション創出のための場として提供しているといったものになります。

続けて官民学連携の学のところです。行政と地元大学との組織間連携それから地元学生との連携による地域での担い手の補完ということで書きました。このように大学等の方が参画いただくことで他分野の専門家の知見を活かした実証ですとかサービスの構築が可能となります。また、実証した、これから実証するサービスや技術が社会的意義のあるものかどうかというところについて客観的な判断を求めることも可能となります。また地元学生に参画いただくことで地域に新しいアイデアや原動力を取り入れることができるのと将来的な担い手の育成にもつながるといったメリットがあるのかなと思っております。事例としてはつくば市の事例を挙げておりますが、市長と学長のトップ同士の連携で各職員や教員等に取組推進を啓発していくといったことをされております。

次に、費用負担ということで書かせていただきました。費用負担に関しては各地域でなかなか苦慮されながら取り組まれているというところでございますが、先行投資という

観点から、長期的な視点に立って取組のロードマップやその効果というのを組織内外で説明をされた上で定期的に取組状況の評価を公表していくといったところが重要になってくると考えております。また、資金持続性というところもリリースして終わりというところではございませんので、官民で連携をしながら進めていくといったところが必要になっていきます。熊谷市様の方ではデジタル田園都市国家構想交付金というものも活用しながら取組を推進されていると伺っております。このように各府省が支援するスマートシティの支援事業で実証実験を行って、先ほどの交付金を活用して改良、進化させていくというのは全国的に見ても非常に素晴らしい取組であるということで考えておりますので、どんどんこのような取組が増えていけば良いなというところで考えているところでございます。

最後に住民参画ということで書かせていただきました。冒頭、基本理念の中にも市民中心主義ということでございましたが、市民の皆様がスマートシティの取組内容を理解してまちづくりに参画していただくということは非常に重要になってきます。昨今ですとデジタルを活用してスピーディかつ丁寧に意見を拾い上げて、それを取組に反映させていくといったところを先進的な地域では特に取り組まれております。例えばポイントということで具体例の一例を挙げておりますが、アンケートということで書いております。今までですと参加した皆様に紙を配ってそれを回収して意見を拾い上げていくというところでされていたと思うのですが、近年ではオンラインのアンケートで簡易的かつ高頻度に調査することが可能となりました。また意見やアイデアの募集についても、これまでの手紙、電話、はがき、ファックスというような手段だけではなくてオンラインアイデアボックスというものを設けてテーマを絞ってスピーディに意見を反映させるといったものも可能になっています。またそのほかにもオンラインのイベントそれからオープンハウス、リビングラボ、いろんなですね、聴取したいその課題に対してアプローチの方法というのは増えてきておりますので、これはあくまでも一例になるのですけれど、さまざまな形でぜひ住民の方の意見を吸い上げて反映をさせていっていただきたいということでございます。具体的な事例としては愛媛県の松山市では街路や駅前広場の整備事業に関して交通シミュレーションをされたのですけれども、市民参加のワークショップの中で可視化したわかりやすいデータを提示して議論を行うといった取組を進められています。これを提示することで計画に対する参加者の方の理解度が向上したというところもデータで確認ができております。また、石川県加賀市の取組では、自治体専用のウェブフォーム、作成ツールで、アンケートを実施してこれまで収集できなかった若年層の方の意見を丹念に収集することが実現したというところでございます。具体的な例としては令和3年度実施したものでは 10 代から 30 代の回答が 43 パーセントを占めているというところで、全体構成割合として若手の方の回答が増えているといったところになります。こちらのシンポジウムの後にもシーンスケッチコンテストというものの案内もあると聞いておりますので、ぜひさまざまな御意見をいただいて、そちらを踏まえて持続性のある地域づ

くりというのを推進していただければと考えております。

では、駆け足ではございましたが、本日私がお伝えしたかった内容はひととおり御説明させていただきました。最後に今一度スマートシティの三つの基本理念ということで御紹介させていただき私からの基調講演を終えたいと思います。

一つ目、市民中心主義、well-being（ウェルビーイング）の向上に向けて市民目線を意識して市民自らの主体的な取組を重視する。二つ目、ビジョン課題フォーカスですね。技術起点、シーズ起点の取組ではなくて課題の解決やビジョンの実現、そこに向けた手段として技術を活用していくというスタンス。三つ目、分野間・都市間連携の重視ということで、複数のサービス、また自治体を越えた広域連携を重視していくといったところを三つの基本理念として挙げております。なので、これから推進をされていくにつれてどうしても技術の方に目が行ってしまうといったこともあるかと思うのですが、取組のところどころで、今やっていることは市民中心主義になっているか、課題の解決やビジョンの実現を目指したものになっているか、技術起点になっていないかというところ、ゆくゆくは複数分野を見つめた取組になっているかというところで適時振り返って、立ち返っていただきながらスマートシティを実現していただいて、市民の皆様の well-being（ウェルビーイング）の向上を実現していただけたらということで考えております。

簡単ではございますが、私からの基調講演は以上とさせていただきます。

本日は御清聴いただきましてありがとうございました。

司会　坂口様ありがとうございました。今一度大きな拍手をお願いいたします。

坂口様、お席へお願いします。

ここで 15 分間の休憩とさせていただきます。14 時 36 分から再開いたしますので、それまでにお席にお戻りくださるようお願いします。

○　令和 5 年度熊谷スマートシティ事業概要説明

司会　時間となりましたので、再開させていただきます。

ここからは、熊谷スマートシティの令和 5 年度の取組について、熊谷市の各担当課から概要を御説明いたします。

なお、五つの事業について御説明したのち、まとめて質疑応答とさせていただきたいと思います。

始めに、熊谷スマートシティの全体像に続き、一つ目の事業、「クマぶら・データ活用まちづくり」について、政策調査課から御説明いたします。

スマートシティ担当副参事　皆様こんにちは。政策調査課スマートシティ担当副参事の市原です。

私からは、最初に熊谷スマートシティの全体像及び熊谷市のまちづくりのコンセプトを説明します。

まず、こちらの図を御覧ください。こちらは、熊谷スマートシティの全体像をイメージに表したもので、市民皆様に提供できるサービスのキーワードとして、スマートシティ宣言に掲げた四つの言葉、「わかる」「つながる」「選べる」「見つける」を円形に配置し、熊谷市の持続性のあるまちづくりをしていく成長サイクル、時計回りの循環を表します。

色味ですが、右上の「わかる」は、これがスマートシティの取組の出発点となりますが、スマートシティに置き換えると「クマぶら」がそれにあたります。アプリの背景色、メインカラーの「クマぶらブルー」、同様に次の「つながる」はコミュニティポイントのクマポが人とつながること、ハートをイメージすることからクマポピンク、「選べる」は支払いを選べる、使い方を選べる地域電子マネーの「クマＰＡＹイエロー」、「見つける」は熊谷市のシンボルカラーの一つであるヒバリ色（オレンジ）を付けています。

矢印の外側には、それぞれのキーワードから「様々な情報を知ることができる」「つながることができる」「多様な選択肢から選べる」など、具体的に書き出し、この後御説明するスマートシティそれぞれの事業が全体の中のどこに当たるのかを示しております。

本日の発表は五つの分野にわたりますが、それぞれの発表の冒頭には、このように、この図の該当部分を表示したうえで発表を行います。

それでは、熊谷市のまちづくりのコンセプトについて御説明します。

熊谷市は「持続性のある地域づくり」という目的を達成するために、デジタル技術やデータを活用する「スマートシティ」、「公民連携」を手段として取り組んでいます。

熊谷市がスマートシティで実現する「やさしい未来」とは、熊谷市を知るアプリ「クマぶら」により、熊谷市のことをよりわかる、好みに応じて選べる未来。

コミュニティポイントなどのデジタルサービスで、ちょっとした「ありがとう」や、人の力になりたいという気持ちを見える形にし、人とつながることができる未来。

そして、市民協働でデータ整備を行い、データを活用したまちづくりや、産・学・官・民が連携して活用し、新たな価値を見つける、つくりだせる未来。

こうした、「やさしい・未来を・発見できるまち」となるべく、デジタルと人の力で進めていきたいと考えています。

それでは、令和５年度熊谷スマートシティ事業概要説明の一つ目、スマートシティの全ての入口になるスマホアプリ「クマぶら」、そして、データ活用まちづくりについて説明いたします。

「クマぶら」とは、令和３年度から導入したLINEアプリで、熊谷スマートシティの入口となるものです。この、「クマぶら」を入口として使用することで、複数のアプリをダウンロード、管理する必要のない、Webアプリ上で連携したサービスを提供できるのが、最大の特徴です。

「クマぶら」を入口として受けることができるサービスには、地域の情報、クーポン、

地域電子マネー、コミュニティポイント、コミュニティバスのスマホ回数券、暑さ対策スマートパッケージ、などがあります。この後の説明で詳しくお伝えします。

続いて「クマぶら」の入手方法です。熊谷市公式 LINE と友達になり、続けて「クマぶら」の登録をするだけです。皆さんも、お帰りまでには、ぜひ、「クマぶら」を友達登録お願いします。

続いて、ただいま実施中の、「クマぶら」を活用したイベントを二つ御説明します。

一つ目は、「スポーツスタンプラリー」です。埼玉パナソニックワイルドナイツ、埼玉武蔵ヒートベアーズ、ちふれ AS エルフェン埼玉、アルカス熊谷、この四つのプロスポーツチームが熊谷市を本拠地として活動されています。これらのチームのホームゲームの観戦、または公開練習の見学でスタンプを集めるイベントです。スタンプの数に応じて、抽選で素敵な特典を準備していますので、是非、皆様、御参加ください。

二つ目は、昨年度も実施し、大変御好評いただきました、熊谷名物の「雪くま」の店舗をめぐるスタンプラリーです。実施期間は、7 月 1 日から 8 月 31 日まで、かき氷好きの方には、全店舗制覇していただきたい企画です。提供いただく店舗様には、どのような年齢層が、いつ、どの店舗でお食事されたのかなど、利用データから読み取ることができます。この蓄積されたデータを分析し、たくさん来店のあった店舗は、どんな工夫をしていたのか、どうしたら売上がアップするのか、といった改善につなげることで、イベント企画は、年々、進化していきます。みんなにとって、いいことづくめのデータ活用の仕組の一つです。

ここまで、「クマぶら」を入口に、市民の様々な活動をアシストする情報・サービスを提供することを御説明してまいりましたが、最後にその先の将来像に触れたいと思います。

本市の将来像として掲げたキャッチフレーズ、「やさしい未来発見都市　熊谷」を実現する市民サービスには、大きく分けて二つのタイプがあります。詳細は後ほど御説明しますが、一つ目は、「まち・住まいの暑さ対策スマートパッケージ」です。これは、熊谷市が培った暑さ対策のノウハウを生かして、暑さと共存しながら快適に過ごしていくために、まちなかの温熱環境を把握してスマートフォンで情報配信する仕組や、気候に合わせて、クーポンの発行やおでかけ情報や暑さ情報を配信する仕組を整備する仕組です。二つ目は、「デジタルコミュニティツール」を使用したサービスで、コミュニティバスのスマホ回数券、地域電子マネー・コミュニティポイントの実装を指します。そして、この二つを通じてコモンデータをデータ連携基盤に蓄積、更新し、住民参加でデータを活用したり、データ分析によるサービスの向上を図り、住む人、訪れる人にとって、「やさしい」熊谷市を目指してまいります。

市民の皆様、関わる事業者全ての皆様と、協力して盛り立てていきたいと考えておりますので、どうぞ、よろしくお願いします。

「クマぶら」は、9 月にリッチメニューの更新、リニューアルを行います。新しい「ク

マぶら」に御期待ください。

ありがとうございました。

司会　続きまして、二つ目の事業、「地域電子マネー・コミュニティポイント」について、商業観光課及び市民活動推進課から御説明いたします。この事業は、「熊谷スマートシティ成長サイクル」の赤枠で囲われた項目に該当する事業となります。

商業観光課長　商業観光課長の金子です。ここからは、二つ目の地域通貨について説明します。

まず、私からは本年度導入を予定している二つの地域通貨のうち地域電子マネーであるクマ PAY について説明します。

その前に地域通貨についてですが、今回導入する地域通貨は、クマ PAY とクマポの 2 種類を用意しています。一つ目は、市内の加盟店でお買い物に利用できる地域電子マネーである「クマ PAY」、そしてもう一つは、換金性がなく、特典を受け取ったり、市民同士で感謝の気持ちを送りあえるコミュニティポイントとしての「クマポ」となります。

どちらも熊谷スマートシティの入口となります熊谷市公式 LINE アカウント内の「クマぶら」を入口として利用登録をしていただき、市民はもちろん、市民以外のどなたでも利用可能なものとなります。

「クマぶら」と連携することで、地域電子マネーによるキャッシュレス決済とポイントの循環で人のつながりを作るコミュニティポイントを、身近に誰でも利用できるサービスとして提供します。

それでは、クマ PAY について説明します。クマ PAY は、市内での消費を囲い込み、地域経済の活性化を図ります。こちらは市内の加盟店のみで使えるスマートフォンを利用したキャッシュレス決済となります。ただし、スマートフォンをお持ちでない方はカードタイプを利用することもできます。これまで熊谷市で発行してきた「熊谷市まち元気商品券」では、1,000 円単位での利用でしたけれども、クマ PAY では 1 マネー1 円として 1 マネー単位で利用することができます。

次に使い方ですが、一般的な電子マネーと同様、スマートフォンを使った支払いでは、利用者がお店の二次元コードを読み込む方法とお店が利用者の二次元コードを読み込む方法の両方が利用できます。カードを使った支払いでは、お店が利用者の二次元コードを読み込む方法のみで利用ができます。

最後にスケジュールですが、クマ PAY は、今年の 11 月から利用開始を予定しています。利用開始と同時に、25 パーセントのプレミアムを付けた総額 10 億円となる「プレミアム付クマ PAY」の販売を開始します。25 パーセントのプレミアム付きです。こちらは応募者多数による抽選販売が予想されますので、9 月から抽選の応募を開始します。その後、通常のクマ PAY は、 3 月に利用を開始します。皆様、この機会に「クマぶら」からクマ PAY の登録、そして、抽選応募の御準備をよろしくお願いします。

市民活動推進課長　市民活動推進課長の丸山です。

続きまして、電子コミュニティポイント「クマポ」について説明します。

クマポは、「まちを元気にし、市民が誇れるまちにする事業やイベント」を開催する団体などを通じて配布します。また、特典を受け取ったり、個人同士で交換できます。単位は名称と同じ、「クマポ」です。「クマポ」には換金性がありません。そのため、クマ PAY に変換する連携は予定しておりません。「クマポ」が市内に流通し、循環することで、市民の間につながりが生まれ、共助や、地域コミュニティが活性化することを目指しています。

「クマポ」には三つの場面、「ためる」、「つかう」、「交換する」があります。

まず、「ためる」です。ボランティア活動やイベント会場にある二次元コードをスマートフォンで読み取ってクマポを受け取ります。ためる場面として、清掃活動、ボランティア活動、「まちを元気にする」イベントに参加などを想定しています。

次に、「つかう」です。使う場面で、二次元コードを読み取るまたは、読み取ってもらうことで「クマポ」を使います。使う場面として、体験やサービス、記念品の受け取りを想定しています。はじめは、ためる、つかうとも、限られた場面となるかもしれませんが、段階的に増やしていきたいと考えています。

最後に「交換する」です。クマポの特徴として、利用者間でポイントを交換することができます。贈る人が表示した二次元コードを受け取る人が読み取ることで、クマポの受け渡しが行えます。クマポをどんなことで交換するかは、自由です。例えば、自分の「できること」が誰かの「して欲しいこと」とつながったとき、「感謝の気持ち」としてクマポを交換することができます。ぜひ、11 月から始まるクマ PAY と 3 月から始まるクマポを御利用ください。よろしくお願いいたします。

司会　続きまして、三つ目の事業、「コミュニティバスのスマホ回数券」について、企画課から御説明いたします。この事業は、「熊谷スマートシティ成長サイクル」の赤枠で囲われた項目に該当する事業となります。

企画課長　企画課長の長谷川です。

私から、三つ目の「コミュニティバスのスマホ回数券」について説明します。

熊谷市では、本年 3 月に、地域公共交通計画を策定し、デジタルを活用した公共交通の維持に取り組んでおります。その一環であるコミュニティバスのスマホ回数券の導入に際して、（1）バス位置情報等のオープンデータ化により、移動方法の選択肢が増え、より効率的な移動ができます。また、（2）回数券を、いつでも、どこでも、スマホで購入することで、利便性の向上と地域通貨による地域経済の循環が図られます。そうして、蓄積されたデータを活用して、移動手段の維持・改善に取り組みます。

はじめに、バス位置情報等のオープンデータ化のイメージです。こちらは、本市のコミュニティバスゆうゆうバスの位置情報等をオープンデータ化し、グーグルなどの経路検索システムでのリアルタイムな検索に対応することを予定しているものです。オープンデータとして公開しますので、検索システムの会社以外でも、活用することができます。

これにより、目的地までの経路検索を行った際に、ゆうゆうバスが移動手段の候補として表示されるだけでなく、渋滞での遅れ等も反映されるため、ゆうゆうバスから他の交通手段への円滑な乗り継ぎにより、利用者の増加につながると考えています。

次に、「ゆうゆうバス」において、スマホを使って地域通貨により購入できる回数券を導入します。これまで紙の回数券をバス車内で販売しておりましたが、スマホでいつでも好きな時に購入することができるようになります。キャッシュレス化と地域経済の循環に併せて、乗車バス停や利用時間帯などの情報の取得により、公共交通に関する今後の政策立案に役立てていくことを予定しています。システムの本稼働は来年２月を予定しておりますが、それまでに、本システムの構築会社でありますエイ・ケイ・システム様とともにゆうゆうバスを運行いただいているバス会社様の御意見を伺いながら使い勝手のよいシステムにしたいと考えておりますので、御協力をお願いいたします。

スマホバス回数券の使用イメージですが、バス車内に設置した QR コードをスマホで読み取り、回数券を使う画面に遷移します。その画面を、運転士さんに目視で検札していただくという流れを考えています。バス車内の QR コードを読み取ることで、スマホバス回数券サーバーに読み取り時間と路線が保存されます。この情報と、バスロケーションシステムのサーバーから取得できるバスの位置情報とを照合することで、乗車バス停を特定する仕様を予定しています。

今後の熊谷市の公共交通の維持のため、デジタルの活用は必須と考えております。今、話題となっている MaaS の検討も含め、今後も各交通機関との連携に取り組み、利便性の向上に努めたいと考えておりますので、関係者の皆様方の引き続きの御協力をお願いいたします。

スマホバス回数券は、来年２月から利用開始となります。

皆さん、ぜひ御利用ください。

ありがとうございました。

司会　続きまして、四つ目の事業、「気象シミュレーション・暑さ対策スマートパッケージ・エコタウン」について、環境政策課から御説明いたします。この事業は、「熊谷スマートシティ成長サイクル」の赤枠で囲われた項目に該当する事業となります。

環境政策課長　環境政策課長の本堂です。

私から、四つ目の気象シミュレーション、暑さ対策スマートパッケージと熊谷市のスマートエコタウンについて説明します。

まずは、気象シミュレーションについて説明いたします。本事業では、市民や来訪者に向け風・温熱環境を可視化することで、暑い場所の回避や涼しい場所へ誘導することを目的として、まちなかに設置した気象センサーのデータを活用しつつ、３D 都市モデルを活用した気象シミュレーション、風・温熱環境シミュレーションを作成します。今年度は、気象データを収集し、事前に複数パターンの気象シミュレーションを作成します。 そして、各時間ごとに最適なシミュレーションを選定して、スマートフォンに表示する仕組を

構築します。

気象シミュレーションを行うために、熊谷駅を中心とした２km 四方の範囲に、気象センサーを設置しました。設置場所は、主旨に賛同を得た民間ビルと公共施設を含めた８か所になります。また、気象データはサーバーの負荷も考慮しつつ研究等に提供することも予定しています。赤の囲いの範囲では、３D 都市モデルをより詳細化し、LOD2 とすることで、気象シミュレーションの精緻化を図ります。右下の図は、気象シミュレーションのイメージとなります。

続いて、暑さ対策スマートパッケージについて説明します。LINE アプリ「クマぶら」に、気象シミュレーションを元にヒートスポット、暑いぞスポットとなる空間・時間情報を提供します。また、周辺エリアでの日陰への迂回路・公共交通機関・休憩場所を優先的に表示します。公共交通機関や休憩場所の利用者に加え、休憩場所を提供する店舗等にも利用に応じたコミュニティポイントを提供することで、暑い中でも安全・快適にまちなかを過ごすことを支援するデジタルツールの「暑さ対策スマートパッケージ」を令和６年夏に市民・来訪者へ提供します。データが連携していることの有益性を手元で実感してもらうことで、暑さ対策を行いながら、政策活用・民間利用が促進される好循環となり、「暑さ対策スマートコミュニティ」の実現を目指します。

続きまして、熊谷市のスマートエコタウンの取組について御説明いたします。スマートハウスとは、「エネルギーの有効活用を目指した住宅であり、エネルギーを創り、備蓄し、IT 技術を使って制御することで、二酸化炭素排出量を減らすことができる住宅」のことを言います。熊谷市では、このスマートハウスが立ち並ぶ、環境にやさしく、健康で豊かな生活を送ることができるまちを、熊谷市の目指すスマートエコタウンとして位置づけ、実装に取り組んでいます。

今回、スマートシティの取組として、（１）モデル街区の形成、区画整理事業と（２）モデルハウス事業を実施します。モデル街区の形成、区画整理事業の概要としては、街区内の道路や住宅地などの配置を、3D 都市モデルデータや市内の気象データを活用した風・温熱環境シミュレーションにより設計・検討し、スマートエコタウンのモデル街区の整備を進めます。モデルハウス事業の概要としては、環境配慮型の住宅を建築し、HEMS を活用してデータ取得を行い、熊谷市版スマートハウスとしての費用対効果を検証します。検証したデータは、今後のスマートハウス補助金やスマートエコタウン整備に役立てたいと考えております。

こちらが、スマートエコタウンのモデル街区の計画になります。まず、１番目が、３D 都市モデルを活用した風・温熱環境シミュレーションの風速分布と、建築外表面・地表面温度分布の分析例となります。

続いて２番目が、気象シミュレーションを基にした街区計画の検討です。冬は北西の風が線路に沿って流れているため、植樹を行うことにより線路沿いから廻り込んでくる冷たい風を遮ることを検討しています。夏は東の風が吹いているため、北東に風の取込口と

なる開口を、そして南側に風の排出口となる開口をそれぞれ設けることにより、風通しが良くなるよう敷地配置を行う予定となっています。

最後に、熊谷市のスマートエコタウンにおける本市の目標をお話しします。３Ｄ 都市モデルを活用した風・温熱環境シミュレーションを実施し、モデル街区を形成、そして、HEMS を活用したデータ取得、光熱水費の低減や CO2 削減についての検証を通じ、本市として推し進める熊谷版スマートハウスの仕様を決定し、補助金制度などにより普及を促進していきます。最終的には、熊谷市の脱炭素化や市民の健康で豊かな生活を実現することを目指してまいります。

来年夏から暑さ対策スマートパッケージの提供を開始します。どうぞ、よろしくお願いします。

司会　最後に、五つ目の事業、人流まちづくりについて、商業観光課から御説明いたします。この事業は、「熊谷スマートシティ成長サイクル」の赤枠で囲われた項目に該当する事業となります。

まちなか再生担当副参事　商業観光課まちなか再生担当副参事の斉藤です。

私から、五つ目の人流データを活用したまちづくりの検討について説明します。

こちらは、「まちなか」からみた「生活や観光・スポーツの各拠点」と「市外」への人流のイメージになります。様々な交通の中継地、市内にあって欲しい公・民のサービスの集積地として、まちなかの活力を維持し、持続可能なまちを作っていく必要があると考えています。

そこで、様々な移動手段による人々の動き「人流」を分析することで、対象商圏への集客数、性別、居住地等のビッグデータを活用して実態を把握するとともに、今後のマネジメントに活用できるのではないかと考えました。これからのまちづくりでは、リアルで実施する「魅力あるサービスの提供」と「歩きやすい・憩える空間づくりと移動手段の確保」、そしてデジタルを活用する「オープンデータ化、デジタルを活用した情報提供」と「スマートシティで取り組む各種市民サービスとの連携」これらを、複数の交通手段と組み合わせ、「まちなかウェルカム」をキーワードに、公共交通やサービスを担う人員の不足を補いつつ、まちなかの魅力を高めていきたいと考えています。

その手段として、様々な移動手段による人の動きを「人流」として一体的に、連続的にとらえる「人流データ分析」の手法について検討していきます。これらの取組により、公民連携でまちなかの魅力を生み出し、現在熊谷駅を乗り継ぎにしか使っていただけていない方の足をまちなかに向けてもらうこと、さらには住み続けてもらう、移り住んでもらうことにつなげていきたいと考えています。

人流の分析手法については、スマートフォンの基地局やＧＰＳによる位置情報の取得、センサーによる通行量や駐車台数の測定、カメラ画像から取得する方法など様々な手法があります。その中で、一番利用しやすいスマートフォンの利用状況だけでも、このシートのように、まちの状況に応じて人流がどう変化したかを分析することが可能です。市役

所と共同で分析を行ったこの団体では、この分析も参照しつつ、下段の三つの方針を定め事業化を検討しています。

熊谷市には、埼玉県北部の拠点都市として培ってきた、国・県の各種機関をはじめ、近隣随一のサービス集積と、それを支えるインフラ・公共交通などの基盤があります。そして、まちの将来に向けて、様々な人材・アイデアが蓄積されています。それらを結びつけるまちなかにおいて、「まちなかウェルカム」をキーワードに、交通手段をまたいだ人流を分析し、公民連携の取組を促進することで、本日の宣言にありますように「デジタルと人の力」を熊谷市の魅力につなげていくことができると考えています。

以上が熊谷スマートシティ「やさしい未来発見都市」と連携して熊谷市のまちなか再生を進める方向性となります。引き続き、関係の皆様の御協力をいただけますと幸いです。

以上で、令和５年度熊谷スマートシティ事業概要の説明を終わります。

御清聴ありがとうございました。

司会　ただ今説明した五つの事業に対する質疑をお受けします。御質問のある方は挙手をお願いします。

質問者①　２の地域通貨のうち地域電子マネーに関して１点お願いします。

市外に住んでいる人も 10 億円のプレミアム付き電子マネーの購入は可能でしょうか。

商業観光課長　商業観光課長の金子です。

今回、プレミアム付き地域電子マネー「クマ PAY」については、熊谷市民限定での販売を考えています。ただし３月以降のクマ PAY につきましては広く市民、市外の方にも御利用いただきたいと思っています。

質問者②　これは全体に対しての質問になるかと思うのですが、効果測定はどう行っていくのかということを伺いたいと思います。単に「利用人数が」だとかあるいは「利便性が」ではなく、先ほど坂口先生の御講演にもありましたように well-being（ウェルビーイング）がいかに向上したか、これをどうデータとして示していくかをお伺いしたいと思います。

スマートシティ担当副参事　スマートシティ担当副参事の市原です。効果測定をどのようにやっていくかという御質問ですが、「クマぶら」の中にアンケート機能が備わっておりまして、そちらでこういったサービスを使った方がどのような意見をお持ちか、満足度はどのようかというような定量的な調査をしたいと思っております。何回やったとか、どれくらいの金額分をサービスとしてプレミアム付き商品券を発行したなどの実績はなくて、市民目線でどのような満足度が得られたかというところには注目していきたいと思っています。

質問者②　では、well-being（ウェルビーイング）の測定指標は結構ありますので、ぶち込んでください。

質問者③　クマポについてお聞きしたいのですが、「つかう」「交換する」という説明はあったのですが、「発行する」という部分について、誰がクマポを発行するのか、どれくらいどうやって発行するのかというのは、市民活動を主催する側としては結構気になるとこ

ろなので教えていただければと思います。

市民活動推進課長　市民活動推進課長の丸山です。

具体的なメニュー等をどのように募集していくかについては計画中なのですが、発行は市で行いますので応募事業者様と相談しながら発行ポイント数等は決めていきたいと考えています。

質問者③　市民活動の主催者が、まず市民活動推進課にこういうことをやりますよと相談して、市民活動推進課の方で、それではこういうポイントを発行しましょうか、そんな相談をしていくようなイメージということですね。

もう 1 点いいですか。熊谷スマートシティ推進協議会の、今の参加団体数がわかるかということと、これからほかの自治体で 150 の参加があるとか、デジタル庁の村上統括官（国民向けサービスグループ長）もおっしゃっているのは、スマートシティに関わる団体組織はたくさんあった方がいいだろう、必要に応じてその中からこの関係はこういう事業者さんに集まってもらって話し合い改善していくようなイメージを話されていて、僕もそうだなと思ったので現在の団体数とこれからもっと広げて参加者、係わる団体・組織というのをどれくらい目指していくのか、無限大に広げていくというのでもいいと思うのですが、もしそういうイメージがあれば教えていただきたいです。

スマートシティ担当副参事　まず一つ目の御質問のスマートシティ推進協議会の会員数ですが、現在 20 の会員様に参画いただいております。

それから、スマートシティの推進体制の御質問だったかと思いますが、推進協議会の下部組織といいますか、具体的な事業の意見交換などをしていくものとして部会をいくつか設置しています。例えばデータ活用部会ですとか、先日発足した MaaS の部会ですとか、いくつかあるのですが、その時にどういったテーマで御意見をいただくのが、我々の事業の推進のために必要かというところを考えて、部会の方は必要な方にお声がけしながら発足していきたいと思っていますので、無限大ということはちょっと難しいかと思いますけれども、市民がどういうことが必要で我々がどういうことができるかという視点に立って部会を運用していきたいと思っています。

質問者④　スポーツの分野で、先ほど御説明をいただきましたスタンプラリーのほかに何か「クマぶら」でできる取組があったら教えてください。

スマートシティ担当副参事　スタンプラリー以外で「クマぶら」でできることについてですけれど、「クマぶら」にはユーザーの属性を絞り込んでプッシュ通知をすることが可能になっています。これによって狙ったターゲットの方に効果的なマーケティングが可能になるというふうに考えています。

質問者⑤　オプトインというデータ活用の話があったと思うのですが、現在わかっている範囲で教えてください。まず 10 代とか 20 代とかデータを取っていくときに、60 代、70 代のようなスマートフォンを持っていないだとか、データのオプトインと言っていいと思うのですが、データを渡していいよということが入っていたと思うのですが、そういっ

た場合にサンプリングバイアスというか、10 代とか 20 代とか若い人の方がアンケートには答えるけれど、年齢がいっている人にとっては、それはあまり答えたくないなという意識もあると思っていて、スマートシティでやっていく中でいうと、全ての世代にとって、やさしい未来を創っていくというコンセプトだと思うのですが、そこでいうとある程度これからチャレンジしようという 40 代 50 代の年齢層がある人たちに対するリーチというかアプローチの仕方を考えなければいけないと思うのですが、20 代とか 10 代とか若い世代だけでデータ活用されてしまうのではないかと不安に思ったので。そのへんのところ、これからどうしようかなという想いだけでもいいので教えてください。

スマートシティ担当副参事　確かにデジタルツールを使う世代の中心は若い方なのだと思うのですが、60 代 70 代の方にも通常使っていただけるように、熊谷市としては高齢者向けのスマートフォンの貸与のサービスを計画しています。それによってスマートフォンの使い方から寄り添って教えていける体制を整えまして、その中で「クマぶら」ですとかプレミアム付き商品券ですとかそういったものが使えるようにサポートしていきたいと思っています。

質問者⑤　今年度も高齢者向けにスマートフォンの講習などの予算も含まれているようなので、全世帯において広く使ってもらいたいと思ったので御意見と御質問させていただきました。よくわかりました。ありがとうございました。

質問者⑥　3 番のコミュニティバスのスマホ回数券について御質問させていただきたいのですが、公共交通の利用というのは当然やっていかなきゃいけないというのは大前提の上で、今回なぜコミュニティバスに特化したのかなというところをお聞かせいただきたいと思っています。そもそもコミュニティバスの利用率、利用者属性、このへんのところからこのスマートシティの項目としてですね、なぜこれを選ばれたのかなというのは、単純に疑問に思っています。

企画課長　企画課の長谷川です。現在コミュニティバスの運行の状況ですが、回数券の利用が 25 パーセント程度います。その中でまずコミュニティバスの効果的、効率的な運行を目指すためにその回数券を使っている方をターゲットにデータの取得をしたいということと、地域通貨の普及のため、コミュニティバスのスマホ回数券の導入を考えました。今後この公共交通の中ではデータを使いながら MaaS、AI オンデマンドなどいろいろ検討していきたいと思っています。今回のコミュニティバスのスマホ回数券は第一弾と考えているところです。

質問者⑥　ありがとうございます。単純に、コミュニティバスの利用者属性等を考えると高齢者の方が多いのかなと思いまして、なかなか激しいすごく大変なところに突っ込まれたんだなと単純に思った次第です。

司会　皆さんいろいろな御質問ありがとうございました。以上で質疑応答は終わりとさせていただきます。

令和 5 年度の事業概要説明につきましては以上となります。

続きましてパネルディスカッションとなりますが、準備が整うまで少しお待ちください。

○　パネルディスカッション

司会　お待たせいたしました。ここからは、「やさしい未来をつくるデータ活用まちづくり」をテーマにパネルディスカッションを行います。

パネリストの皆様を御紹介します。

国土交通省の坂口専門調査官。坂口様は、官民連携プラットフォームの事務局を担われており、現在、スマートシティ全般に対応していらっしゃいます。

続きまして立正大学 データサイエンス学部の白木教授。白木様の御専門は、リモートセンシング、都市環境、地理情報システムで、人工衛星から取得した地球表面の画像を利用した都市環境、特にヒートアイランド現象の現状把握および要因解析を御研究されているほか、本市以外でも、リモートセンシングとビッグデータにもとづく熱ストレス分析と都市計画への応用や、フィンランドにおける土地利用の変化が温度に与える影響の評価などに取り組んでいらっしゃいます。また、本市のチーフアーキテクトとしてアーキテクトチームを総括されるほか、主に地元大学連携、センシング、ＧＩＳの分野で御助言をいただいております。

千葉大学大学院工学研究院の鈴木准教授、鈴木様は建築・都市空間の分析や設計を御専門とされており、スマートシティとして国内外で有名な柏の葉で、空間デザイン部会の座長や、ＵＤＣ（アーバンデザインセンター）すみだでは副センター長を務めるなど、最先端の建築・都市空間の設計やまちづくりで御活躍されています。また、本市のアーキテクトとして主に建築・都市空間分析、人流分析、都市インフラへの実装の分野で御助言をいただいております。

コーディネーターは熊谷市の大島副市長です。

それでは、よろしくお願いします。

大島副市長　副市長の大島でございます。座ったまま失礼いたします。

この熊谷スマートシティにつきましては、本当にさまざまな方から御助言をいただいております。先ほど紹介申し上げましたアーキテクトの皆様のほか、20 者にご参画いただいているスマートシティ推進協議会、こちらは令和 2 年から立ち上げまして、熊谷市と契約関係があるかどうかに関わらず、専門的な知見をいただく官民連携の協議会として運営しているところでございます。その他市内のさまざまな分野の方に御助言・アドバイス・御意見いただきながら、熊谷スマートシティ実装に向けた今年度の取組を立ち上げてまいりました。ただ皆様の意見をこの場でいただいているとなかなか厳しいところ、た

だ一方で先ほど質問の時間を取らせていただきましたけれども、やはり、我々がどういう議論をしながら熊谷スマートシティを立ち上げようとしているのか、そうしたところを片鱗だけでも、少し体験していただければと思いまして、短い時間ではございますが、このパネルディスカッションの時間を設けさせていただきました。

お三方、大学の先生の鈴木先生、白木先生からは御専門のお立場から熊谷スマートシティに御期待いただくところ、また坂口専門調査官からは業務の上で全国でスマートシティを御覧になっている中で熊谷について気になる点等ございましたら、この場では多少ざっくばらんに御意見、コメントいただきまして、進行ではございますけれども可能なフォローをさせていただきたいというところでございます。よろしくお願いいたします。

それでは早速ではございますが、白木先生、チーフアーキテクトから。我々、何とかここまでたどり着きましたというところに対しまして、コメントなど頂けましたら幸いでございます。お願いいたします。

白木教授　立正大学の白木でございます。僕の方もですね、今回のお話聞かせていただいて、非常にまとまったなというのが第一印象でございました。そのような中でいくつかコメントさせていただきたいと思っております。

私の専門というところで、地理情報システムとか、リモートセンシングという、要は人工衛星の画像解析、それを使った都市の熱環境の評価の関係から少しお話をさせていただければと思います。

まず熊谷市の気温分布はどうやってできているのかというと、基本的には内陸にあるということで、フェーン現象が一番大きく効いている。フェーン現象で熱くなった上にヒートアイランド現象というのが発生しているというところで、かなり過酷なのは間違いないだろうというような印象を持っています。

そのような中でもうちょっとクローズアップしてみると実は熊谷市内も全部が同じ気温、暑いというわけじゃなくて、実は暑さというのは数度くらい違っているのですね。具体的に言えば、国道 17 号線付近というのはものすごく暑い、その次に熊谷駅周辺で、一番涼しいのは荒川沿いになってくると、もう本当に数度違ってくるわけです。そのような中で、時間が経っていくと温度ってどんどん変化していく中で、お話がどこかであったと思うのですけれども、ホットスポットというものをちゃんと理解してそこを時間帯によって回避していくというようなことは非常に有効なやり方だと思っております。

一方その反面ですけれども、気温は、先ほど言ったとおり分布としてはかなり温度変化があるので今回は熊谷駅の北口の方を中心として何点か気温を測っていくということだと思うんですけれど、実はちょっとまだ足りないかなというのが実際の感想です。それを使ってシミュレーションをやると、そこらへんはたぶんうまく合わさって来るかもしれないですけれども、逆にもうちょっと離れたところというのが、精度としてどうなのかというところがあるということで、そこらへんは今後の課題、お金もかかることですし、採ったデータを Wi-Fi で飛ばし、さらにいろいろとあると思うので一つ大きな課題かなと

感じました。

立正大学も熊谷市内にある大学として可能な限りは協力は惜しまないというふうに、僕が言っていいのかわからないですけれども、惜しまないとみんな思っていると思いますので、そこらへんはぜひ協力させてください。

もう１点ですけども、３D 都市モデルが活用されていて、その３D都市モデル、今回の発表のなかで一番クローズアップされていたのが、熱環境評価シミュレーションというところにあったのだと思いますけれども、非常に使い勝手がいいというかいろんなことに利活用できるような、例えば災害であったりだとか防犯と、いろいろと使えるところがあるので、もし今後こういうように使えるんじゃないかなというようなイメージがあればぜひ教えていただきたいなと思っております。

以上です。

大島副市長　はい、ありがとうございます。

まず、気象センサーのお話しいただきました。気象センサーはもちろん最低限の数でうまくシミュレーションを実現するということを試みているところもございますし、あとは気象センサーというのは実は気象庁の検定を受けたものでないと温度ですとかをデータとして出してはいけないというようなルールがありますので、そのメンテナンスもきちんとして、大学の研究ですとか民間の方にこれは気象庁が数値を出してもいいという機器の検定を受けて出しているデータですと差し上げることを前提に、今後シミュレーションの精緻化ですとか、民間の方の観測データもうまく活用する方策というのを考えていければと思っております。

あとはもう一つ３D 都市モデル、先ほど坂口専門調査官がおっしゃったプロジェクトプラトーというのは国土交通省が全国で都市計画の図面に高さを与えたものだと思っていただければと思いますけれども、それを都市計画 GIS ですとかの標準形にしようというプロジェクトが全国で進んでいるなかで熊谷市でも取り組んでいるところです。高さがございますので、気流ですとか日照があった時に日影がどこに生じるかといったところがリアルにシミュレーションできるということで、今日は気象シミュレーションへの活用を紹介させていただきました。高さがございますので、この地域はここが破堤するとこれぐらい浸水する可能性があるといった浸水データと重ね合わせると、この避難所は安全なのか、そこに避難することができるのかといったシミュレーションにも、防災にも使える。

あとは高さがあることで、先ほど防犯とありましたのは、視線が通るかというところをイメージされているかと思いますけれども、立体になっていることで景観ですとか視線が通るかどうかの防犯、そういったところのシミュレーションにもある程度使えるのではないか。防犯に使うとなると建物だけでなくて塀ですとか、街路樹ですとか、物陰になってないかというところがいるので、少し緻密なデータを作る必要がありますけれども、今後全国で普及していきますとデータの作成、更新のコストは下がっていくかと思いま

すので、うまくまちづくりに取り入れていければと、そのように考えております。

あと、今年度は市民向けのワークショップを秋以降に予定しておりまして、防犯と景観については自主防災組織やエリアマネジメント団体の皆様に実際その３D 都市モデルのデータをウェブ上の GIS で操作してまちづくりに参画いただく道筋を作っていきたい、そのように考えているところでございます。

すみません、説明が長くなって恐縮ですけれども、白木先生いかがでしょうか。

白木教授　十分理解できました。

今、お話聞いていて日照時間とかというキーワードがあって、たぶんああいうのは太陽光パネルとか、例えばどこに置きたいというときに日が一番当たるところに置くのがベストなので、そういうシミュレーションとかでもね、いろいろ使えたりするので、そのへんはまた御相談させてください。

大島副市長　ありがとうございます。

続きまして鈴木先生からコメントいただいてもよろしいでしょうか。

鈴木准教授　非常に良い提案をされてらっしゃるかなと。これから市民の方々に具体的に体験していただくということは結構重要でして、やはりスマートシティ、先ほど坂口専門調査官の御説明ありましたが、スマートシティってどういうデータを使っているかというのが、なかなか実感できないというようなところがあります。ただスマートシティというのはやはりデータを下支えして、市民の方々がより自分好みにカスタマイズして活用していくということなのかなと。

MaaS の話をさせていただこうかなと思っているのですが、MaaS で、観光で行くときに、観光するために旅行会社行きますね。パンフレットで大体メニューが決まっていてそれに応募していくということなのですけれど、MaaS に関しては、企画から、行くところ、例えば自分でゆっくり旅を楽しみたいなとか、時間ないから要所だけバーッと行こうとかいうふうなことが、先ほどのデジタルとかデータを使うと自分好みのものができるということなのですね。それは旅行の話ですけれども実は市民生活でもそういうことでして、そういう中で、先ほど御紹介があったように人流データとか、民間の持っている売り上げの話とか、公共が持っているデータとか、それは将来的にはどう連携するかということはありますけれど、そういうことも含めて最適化するということだと。知らず知らずのうちにさっきの「クマぶら」とかそういうものを通してやっていくと、ちょっと豊かになっている、自分好みの生活ができるという話なのかなと思っております。で、それが１年、２年後にできるのですよね。すばらしいなと思っております。

MaaS の話をさせていただきますと、先ほど循環バスの話がございましたが、それは市民生活として非常に重要なものだと思います。郊外に出るためにはやはり路線バスがあるということだと思います。例えばタクシーとか、場合によっては、シェアの話とかいろいろあるとは思うのですが、そこをちょっとした未来としては例えば定額で自分の好みで早く行きたいとか、ゆっくり回りたいなとかいうところで選択できていろんな活用が

できる。忙しいから今日はタクシーで行きましょう。というようなことがそれぞれスマホの中でできるという話になってくるかなと思うのですね。

後ですね、バス停を考えると、バス停って 250 メートルか 500 メートルの間で計画されて、市民の交通手段なのですよ。だから、市内の駅周辺だと間隔が狭く、遠くに行くときは 500 メートル、場合によっては 1 キロメートルになったりするのですけれども、そこを利用された方がどういう属性で使ってらっしゃるかというのは実は人流で分かるのですよ。それがもしかしたら適切じゃないかもしれない。例えば、人流というのは人の流れだけじゃなくて車も行きますので、渋滞を防ぐというのも含めて、場合によってはもしかしたら事故が起きやすいところがもしあったとしたらそれも含めて総合的に考えることができ、そのエリアの方々の利便性が上がっていく、そんなようなことがデータを活用するとできるということです。

ちょっと先の未来の話をしましたが、その一歩として循環バスのデータとか利用されていらっしゃる方とそんなようなことができるのかなということで、そういう意味では非常にこれから楽しみだなと思いますし、ぜひ LINE 登録しようかなと思っております。

大島副市長　ありがとうございます。

先ほどの五つの分野の中では人流まちづくりが一番最後になっておりますが、これから検討を重ねていかなければならない分野というところでございます。我々やはり人流を分析して面白がっているということではいけなくて、まずは皆さんの移動手段をどうやって守るかと、公共交通の課題がまずあり、その先にいろんな公共交通機関の連携がよくなって、人が動きやすくなる。典型的なのは免許を返納いただいた方がいろんな交通機関を乗り継いで目的を達しやすくなるというところがあると思っていまして、そこに賑わいが生じる。かつ、本日もおいでいただいていますけれどもバス・タクシーの事業者の皆様がきちんと経営が成り立ちつつ空白地域を極力少なくしていくといったところのバランスですね。そこのためにやはりちょっとデータをどういうふうにとっていくか今スマホのビッグデータですとかが提供されるようにはなっていますけれども、我々行政が必ずしも分析できるようになっていない。あるいはやはり独立したシステムの方がコスパがいいということもありまして、必ずしも今市内で動いているいろいろなシステム同士が簡単にデータ連携できるわけではないというようなところをこの公共交通計画の中にですね、こういったデジタルの課題をいくつも上げさせていただいた以上、どういうふうにデータを組み合わせていくのかそれぞれのシステムで無理がない範囲で重ね合わせて我々が今後の公共交通のロードマップを描いていくにはどうしたらいいのかということを、今年度から検討を本格化させていきたいと考えているところでございます。

公共交通の観点、料金ですとか、ダイヤの観点からあるいはスマートシティの新しいデジタルの手法で、どういう未来像が描けるのかという観点からそして公共交通だけに限らない、駐車場に車を置いていただいて乗り継いでいただくパークアンドライドといったものを組み合わせて、どうしたら市民の皆様の生活が満足度が高いまま維持できるの

かといったところを精一杯検討してまいりたいと思っております。ありがとうございました。

続きまして坂口様からコメントいただけますでしょうか。

坂口専門調査官　国土交通省の坂口です。本日は貴重なお話を聴かせていただきありがとうございました。

私の方はですね、今日、冒頭のスマートシティの宣言から始まって五つの事業の話とか、いよいよこれからというか、私もワクワクしながら話を聞かせていただきました。効果測定や市民の方の意見を取り入れながらリリースした後もアジャイルに育てていって欲しいなというところでお願いするところでございます。

一方で気になりましたのが、スマートシティの連携を進めていくためには、官民の連携が必要ですということで基調講演の中で申し上げさせていただきました。今日は市の取組ということで五つのお話を聴かせていただいたのですが、そこで語り切れていない官民学の連携ですとか、そういったところの話がございましたら教えていただけますでしょうか。

大島副市長　はい。ありがとうございます。

私どもは今日説明申し上げた内容、市民の方に市役所がどうサービスの基盤を提供できるかといったところに偏っているなという自覚はございます。やはり、スマートシティを持続させていくためには、民間の皆様にも活用いただけるデータの在り方ですとかシステムの開発の考え方が必要だと思っておりまして、実はこのスマートシティの今年度の実装本格化に向けて昨年夏くらいからさまざまな団体さんと意見交換をさせていただいている中で、当然産業界とも意見交換させていただいております。我々の方が予算を年度で立てていくというところがあるので、市役所の市民向け基盤ということで先に報告させていただきましたけれども、実は本日おいでいただいている関係者の方と産業 DX を熊谷でどうやって推進していくか、特定の事業者を助けるということではなくて熊谷は産業 DX に熱心な企業さんを歓迎しているということをきちんと外に発信して熊谷の働く場所の確保につなげていくにはどうしたらいいのか、そういったことも実は並行して検討しております。

目標としては秋、遅くとも年内くらいには来年度に向けて我々産業 DX に関してどのような考え方をしているのかということをオープンにしていければなと考えているところでございます。並行して進めているのですが今日の発表には間に合わなかったというところでございます。

坂口専門調査官　非常によくわかりました。ありがとうございます。

大島副市長　それではもう少し時間がございますので、今、産官学連携というところを坂口専門調査官からいただきましたけれども、ちょっとその観点についてもう少し、こういう点ですとか、熊谷スマートシティに盛り込んでもいいのではないかみたいな追加の御発言があれば、白木先生、鈴木先生にお願いしたいところですが、いかがでしょうか。

鈴木准教授　先ほどの質問にあった、あらゆる世代に向かって、どうやって届けるかというのは結構重要なことだと思っておりまして、すごく悩ましい。私もずっといろんなところでやっておりますけれど、なかなか難しい。高齢者の方であればちょっと馴染みがない。若者の方々は、どちらかというととっつきやすいというふうなところが、それは確かにそうだと。伝え方はやはり同時並行でやっていかざるを得ないと思うのですが、短期間、中期、長期という目標をたぶん決められていらっしゃると思いますが、例えばシーンスケッチの話がありましたが、そういうのを通して例えば中学生、高校生の方々がそういうものをやった時に、「こんな体験をしたよ」ということを、家庭の方に持ちかえって家庭の方で話題になって「お父さん、なんか面白いことやっているね。」「おじいちゃん、こうなんだよ。」というふうな形で、イベントをやるっていうことも含めて、いろいろな届け方、運動みたいになってくると話としてはいいかなと思います。公民学連携でまちづくりをしている中で、市民の巻き込み方をどうやってやるかというのは結構ありますので、うまくはいかない部分もありますけれども、やっぱりそういう届け方をちょっと工夫していければなと、一緒に考えていければなというふうに思います。

あともう一つ地元に立正大学さんがございますので、立正大学さんとぜひ協働されたらいいですよね。僕が言うのも変で、勝手に言ってますが、先生方も素晴らしい人もいらっしゃる。何せ学生がいますし、学生さんは市内に住んでらっしゃる方もいらっしゃると思いますので、そこで学んで、じゃまた熊谷に帰ってきて、ここでちょっとやってみましょうかという感じもありますし、何かイベントやるときに学生さんがいると、教員が主体でアンケートの協力お願いしますと言っても、むさくるしい、誰だかわからないという感じでなかなかアンケートに答えてもらえないのですが、学生さんがやってくれるといろんな方に協力していただけるので、ぜひそういう形で何か伝えられるといいなと思いながら、公民学連携の一つの例としてお伝えしました。

白木教授　今、鈴木先生がおっしゃったとおりですけれども、立正大学の学生、たぶん僕のイメージですけども、4 年間少なくともいると愛着ってわくみたいで、熊谷のことを真剣に考えてくれる学生さんが、地方の子でも多かったりする。本当に第二の故郷みたいな形で思ってくれる学生さん、比較的多いので、ぜひ、これも僕が使ってくださいなんて言ったら学生に怒られてしまうかもしれないですけれども、ぜひ協力をさせていただければなというふうに考えております。

今、鈴木先生の話を聴いてもう一つ思ったのは、やはりおっしゃったとおり高齢者に限らずおそらく 20 代 30 代にも得られた情報というのを提供しますよね、提供した情報って見ないのですよ、なかなか。で、なぜ見ないのかというと、おそらく難しいからとか、長いからとかいう形だと思うのですね。で、一番わかりやすいのはやっぱり可視化して画像として出してあげるというのがたぶん一番わかりやすいし、興味も引いてくると思うのですよね。そういう中では、Web GIS とかというので得られたデータをどんどん可視化して出して、もしかしたら例えば Web GIS 上で、ログインすることが必須になってく

ると思うのですけれども、書き込みがあって、こういうところはこうじゃないかというような、要は市民目線からいろいろな情報というのを得ていくと民間の協力というような形でうまく進むのではないかなと思いました。

以上です。

大島副市長　ありがとうございます。引き続き両大学と連携を取らせていただきたいと思います。あと、鈴木先生からシーンスケッチという言葉出ましたけれども、この後今後の取組として紹介させていただきます。地元の中学校の校長会さんですとかは実はすでにこういうことを夏休みの課題にしていただいてはどうかみたいな説明も差し上げているところです。我々スマートシティを先ほど産業界とも連携していこうとしているということを申し上げましたけれども、やっぱり大人だけのものでもないと、これからスマートシティを面白がっていただくのはやっぱり中高生・大学生であろうという想いもございますので、熊谷の 10 年後のスマートシティの姿、現在我々が立ち上げているものの延長線上のアイデアもいただきたいですけれども、世の中さまざまなスマート技術、スマートシティございますので、それが熊谷の生活をどう変えるかといったアイデアコンテスト的なものをこの後御紹介したいと思っております。

今日の時点ではどうしても市役所が市民のためにと考えた型にはまったものが多かったかと思いますけれども、市民の皆様、産業界の皆様と意見交換をしながらこの熊谷の将来像を一緒に描いていくツールが、かなり使いやすい面白いツールが一つ増えたんだというようなことを共有していければと思っております。

それでは、パネリストの皆様、何か言い残された、言い足りなかったことございましたらいかがでしょう。

よろしいですか、それでは、パネルディスカッション以上とさせていただきまして、司会に進行を戻したいと思います。

皆さん御清聴ありがとうございました。

司会　皆様、ありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いいたします。

それでは、お席へお戻りいただければと思います。

○　今後のスマートシティの取組

司会　続きまして、本日のシンポジウムの最後のプログラムとなりますが、今後のスマートシティの取組につきまして、政策調査課から御説明いたします。

スマートシティ担当副参事　それでは、今後のスマートシティの取組をお知らせします。

今後、熊谷市がデジタル技術を活用していく中で、どのような未来になるのが理想的か、楽しいか、うれしいか、豊かで幸せと感じるか、皆様と共に考えるきっかけや市の取組の

参考とするため、未来の熊谷市を描く「シーンスケッチコンテスト」を開催します。

10 年後の熊谷市を描くリアル部門と、まったく制約のないＳＦ部門の二つの部門で作品を募集します。応募方法等の詳しい内容は、7 月下旬をめどにクマぶらやホームページでお知らせします。

本日最後となります。本日は本市の取組を五つの分野からお伝えしてまいりました。システムから得られるデータを蓄積、分析、更新して次の施策に生かすことが、「持続可能なまち」を実現するために重要であると考えます。例えば、コミュニティバスの位置情報など行政が提供できるデータはもちろん、市民と協働で作るバリアフリー情報などのデータを整備することで、データ活用サイクルを回していきます。また、これらのデータは地元大学の研究や新たなサービスに活かします。このシステムとデータの循環を回すことで、新たな発見、サービス、事業が生まれます。皆様どうぞ私たちと御一緒にやさしい未来を発見し育てていきましょう。

本日は御参加いただきまして誠にありがとうございました。

○　閉会

司会　おかげをもちまして本日予定しておりましたプログラムは全て終了いたしました。

それでは、大島副市長から閉会のことばを申し上げます。

大島副市長　副市長の大島でございます。

本日は、このように多くの皆様に本シンポジウムに御参加いただき、最後まで熱心に聴講いただいたことに心から感謝を申し上げます。

また、御多忙の中、基調講演をいただきました坂口様、パネルディスカッションに御出席いただきました白木様、鈴木様、そして本シンポジウムの開催に当たり御協力を頂いたほかのアーキテクトの皆様、関係の皆様に改めて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

市長が申し上げました「熊谷スマートシティ宣言」からスタートした本日のシンポジウムは、本市スマートシティの取組が、実証実験から社会実装へのステージに移り、加速していくための大きな節目だと考えております。

人口減少等、社会経済環境が大きな変革期にあることは皆様も実感しておられるかと思います。スマートシティの推進は、これは万能薬ということではございませんけれども、地域の課題解決に寄与し、これからの幸福、well-being（ウェルビーイング）を感じられるまちづくりに、欠くことのできない手段だと考えております。今後も引き続き、熊谷市のデジタル推進に対する御支援と御協力をお願い申し上げますとともに、御臨席の皆様方の御多幸、御健勝を祈念いたしまして、閉会の言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

司会　以上で熊谷スマートシティシンポジウムを閉会させていただきます。

お忘れ物などございませんよう、気をつけてお帰りください。

本日は誠にありがとうございました。